
ISブレイク

タナトス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISブレイク

【Nコード】

N8088Y

【作者名】

タナトス

【あらすじ】

一人の男が『ボーダーブレイク』をプレイし終え、家路に帰る途中、事故にあう。

しかし、男は死ななかった。

これは男がISの世界でボーダーと偽り生きていく事を決断した話さあ、偽りのボーダーよ境界を破壊しろ！！

プロローグ

一人の男がゲームセンターの自動ドアから鼻歌交じりに出てきた。

歳の頃は20中ごろだろうか。

男はタバコと取り出すとスナップを利かせてタバコをソフトパッケ
ージから1本上げる。

ソレを口に銜えるとジーパンのポケットからジッポを取り出しなれ
た手付きで蓋を親指で弾きフリントを擦る。

フリントとウィックが擦れ火花が走り火縄が点火する。

淡いオレンジ色の炎が灯ると男は炎にタバコの先端を近づける。

タバコの葉と巻紙が焼ける匂いが男の鼻腔を擦る。

男はこの瞬間が堪らないと言わんばかりに肺一杯にソレを吸い込
んだ。

「……ふ~~~~」

男は吸い込んだ紫煙を吐き出しながらジッポの蓋を閉じポケットの
中にソレを仕舞う。

「いや~~~~~ボーダーブレイクの後の一服は格別だね~~~~」

男はそう言いながら玄関先にある灰皿に灰を落としながらそう呟いた。

「それに苦節10ヶ月でようやくとB1……社会人で仕事しながらだからだからな……」

彼は入社2年目の社員だ。勤め先は中企業で給料もそんなに良い訳ではない。

彼は家賃、光熱費、食費と貯金とタバコ代と車の維持費を除けた金額、35000円でこのゲームをプレイしていた。

文字道理、財布がボーダーブレイクしそうな勢いだ。

ただ、溜めた貯金を切り崩さないだけ廃人よりはマシと言うレベルだろう。

「諭吉大先生がギガノト流弾砲喰らったみたいに吹っ飛ばす姿は切ないぜ……」

ボヤきながら男は鬱屈した気分を振り払うが如く吸い込んだ紫煙を思いつきり吐き出した。

暫くタバコを楽しんだ男は吸殻を灰皿に放り込むとパーキングに止めていた愛車の所まで歩く。

「さて……帰ってメシ作るか……」

男がボヤきながらインテリジェンスキーのボタンを押して愛車の口

ツクを解除すると突如としてスキル音が男の耳に飛び込んできた。

「何だ？」

男がそうボヤいた時には時既に遅かった。

男の目の前に大型ダンプカーのボンネットが見えていた。

ISブレイク 1話 『境界を飛び越えた男』

ここはIS学園、IS、『インフィニット・ストラトス』と言うパワードスーツの操縦者及び整備士、管制官、開発者を育てる高等学校である。

湾岸エリア直ぐ近くに場所を構え、その広さはカナリ広大な土地を有している。

その職員室に2人の女性が向かい合って話していた。

一人は黒髪をポニーテールに束ねた目付きが鋭い美女、もう一人は緑髪のショートヘアでメガネをかけた物腰穏やかな女性だ。

この二人に共通点があるとするならばこのIS学園の教師でスタイル抜群の美女と言った所だろうか。

緑髪の女性、山田 真耶が黒髪の女性、織斑 千冬に語りかけた。

「しかし、驚きましょ。あのニュース」

真耶の言葉に千冬は思う所があるのか曖昧に返事を返した。
はっきり言えば彼女らしくない。

「ああ、例の……」

それに気付かず真耶は話を続ける。

「まさか男性でISを動かせるなんて。しかもソレが織斑先生の弟さんだなんて」

その言葉に千冬は弟の織斑 一夏の顔を思い出す。

そんな時だった。

突如として振動が窓を揺らす。

「「な!？」」

2人がそう言った瞬間、校内にアナウンスが流れる。

『第3アリーナに侵入者あり! 待機中の担当職員は直ちに現場に向かわれたし』

その放送を聴くが早い千冬は真耶に告げる。

「山田先生! ここから我々が近い。行きましょう」

「了解です」

そう言うと彼女達は窓から飛び降りISを装着し空へと飛び上がった。

二人が到着した時、二人は我が目を疑った。

約5、6メートルのスノーホワイトに塗装され、左肩には三日月に『砲』と言うエンブレムがあらわれたロボットがアリーナ中央に大の字になった状態で寝転んでいた。

真耶はソレを見ながら啞然とする。

「な、何なんですか！？ コレ！？」

驚きながらも真耶はラファールのライフルを油断無く構える。

「解りません……唯言える事は我々の知らない未知のロボットと言った所でしょうか……」

千冬も困惑を何とか隠しながら真耶の疑問に何とか答える。

しかし、困惑の中にあっても彼女は打鉄の日本刀型ブレードを油断無く構える。

何せ相手のロボットの右手には戦闘機に搭載するような大きさのガトリング砲が握られていた。

見た目は損傷らしい損傷が無い事からも油断できない。

幾ら世界最強の兵器と銘打つISでも攻撃を受け続ければシールドエネルギーがエンプティーとなり使用不能になる。

未知の敵となるかもしれないモノに油断を持ち込む程彼女達は甘く

ないのだ。

背中にも何やら物騒な代物がありそうだ。

彼女達が油断無く近付こうとした時だった。

突如、ロボットが発行する。

「ッ！？」

二人は大急ぎでロボットから距離を取る。

光が晴れ渡り突如としてショートヘアの男が姿を現す。

「な！？」

二人は何が何やら解らないままそう唸った。

いや、この場合、唸るしかなかったという方が正しい。

「ろ、ロボットが男性に……」

真耶の啞然とした呟きに千冬が如何したものかと頭を抱えるのだっ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8088y/>

ISブレイク

2011年11月23日23時55分発行